中山義秀全集

第八巻

柘植の日記
前夜の感想
花園の思索 他

新潮社版

S

中山義秀全集

第八卷

新潮社版

© Sumiko Nakayama, Tetsuya Akada,
Reiko Yamamoto and Himeko Nakayama,
1972, Printed in Japan.

中山義秀全集　第八巻

印刷　昭和四十七年三月五日
發行　昭和四十七年三月十日

定價　二〇〇〇圓

著者　中山義秀
發行者　佐藤亮一
發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一、電話
東京二六〇―一一一一、郵便番
號一六二、振替東京八〇八

印刷所　塚田印刷株式會社
製本所　神田加藤製本所

（亂丁・落丁本はお取替えいたします）

中山義秀全集第八卷　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「柘植の日記」

Ⅰ 隨筆

風塵 一一
壺中の天地 一三
輝かしい出征 一七
妻戀ひ 二〇
松伐り 二四
賭 二六
獨身の穴熊 二七
散る花 二八

Ⅱ 紀行

富士 四〇
高原風景 四七
旅日記 四八
北土の午後三時 五二
雪國 五四
那須高原 五六

Ⅲ 柘植の日記

美しき春の姿は何處に 六〇
寂しい學校 六四
悔恨 六六
冬花抄 六七
雲の論理 七一

Ⅳ 感想

作家の結晶　七七
精神力　八一
冬の露臺　八四
風の夜　八七
ぼんやりした考へ　八九
尊德と諭吉　九一
考へる人間　九三

V 評　論

布石だけの感想　九六
精神の權利　一〇一
現實の個性　一〇四
リアリズムの問題　一〇八
「青い花」の夢　一一三
素材と心理について　一一五
文學的な人生　一一九
世界的神經　一二三

「前夜の感想」

I 感　想

前夜の感想　一二六
四十代の心境　一二九
神心の知識　一三四
葉隱　一三八
鍛錬の道　一三九
寫生道　一四一
私小說家の魂　一四三
私小說以後　一四四

小説の季節　一四六
頑なペン　一五〇
我等の悲劇　一五二
藝術の衣裳　一五五
映畫の「碑」　一五八
雜感　一六〇
一、祝盃　一六〇
二、文學の柱　一六一
三、現實の炬火　一六二
四、世相　一六三
五、禪機　一六四
六、現代の構想　一六四
七、隱棲の心　一六五
八、世を戯れに　一六六
雜記　一六七
一、トルストイについて　一六七
二、福澤諭吉の父の死　一六九
三、禁止本獄中記　一七二
四、夜明け前　一七四
五、やくざな犬　一七五
示現流　一七七

Ⅱ 隨筆

老いた母と老いた子　一八二
羇旅轉々　一八六
修齋記　一九一
とめ女聞書　一九五
みちのく　一九八
天馬　一九九
いでゆ綺談　二〇二

思ひ出　二〇五
旅情海に入る　二〇六
一旅人　二〇九
山への電話　二一一
厄年　二一二
非現代人　二一三
盍中短信　二一四
凡父　二一五
家庭の神祕　二一六
華麗な儀容　二一八
春冬去來　二一九

Ⅲ　文藝時評

魂のあらはれ　二二四
一つの疑問　二二八
現實の危機　二三五
試煉の秋　二四一
文學の華　二四六
苦鬪の五十年　二五〇
戰ひの文學　二五三

「花園の思索」

○　二五六
詩魂自在　二五九
古代の雨　二六一
太古の宿　二六六
高野山　二六七
木曾谷　二六八
裏磐梯

利根の浮草　二七二
○
私の讀書遍歷　二七六
盲目花を觀る　二七八
私達はどんな時代にも生きて
ゐる　二八三
人生の默示　二八七
獨居の窓から　二九五
現代人の彷徨　三〇一
○
父を語る　三〇四
つむじ　三〇五
ふるさとの記憶　三〇六
ふるさと記　三一〇
日籠の里　三一一
酒と正月　三一二
屠蘇氣分　三一四
七五三の祝　三一六
わが無賴の友　三一七
アパートの歲月　三二〇
職人　三二〇
名工　三二三
ある憂愁　三二五
罪と詩　三二七
○
歷史小說について　三二九
利休と芭蕉　三三〇
元祿武士　三三二
賢人愚人　三三三
文學青春傳　三三五

殘花なほ存す　三四〇
田畑修一郎　三四六
作家の死　三四八
小林、川端、井伏の文章　三五一
今日の憂　三五四
花園の思索者　三五六
横光氏の課題　三六四
優れた調馬師　三六七
横光利一氏との三十年　三七一

「生きた愛した死んだ」

夏草敷いて　三七三
「生きた、愛した、死んだ」　三七四
失はれた時の追憶　三七六
鷗外と史實の考證　三七八
人々の性根と宿命　三七九
顔馴染の番頭の話　三八一
日光の山中で想ふ

わが文學語錄

わが文學語錄　三八二
遺産　三九一
葦戰ぐ　三九五
文章について　三九七
カメラ　四〇〇
閑談　四〇二
冬の旅　四〇三
未來の日本人　四〇四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

書齋　四〇六
方丈の住人　四〇七
——川崎長太郎の人と作品——
★
旅の誘ひ　四二二
文學のふるさと　四二三
封建　四二六
自棄の逸民　四二七
猿芝居　四三〇
鎌倉交遊記　四三七
庵の主　四四五
*
解説　石塚友二　四四九
解題　四五六

中山義秀全集　第八巻

「柘植の日記」

I 隨筆

風塵

大和路から上つてきた人がある。

美しい人であるが、その姉もまた彼女に劣らず美しい。美しい姉妹二人が關東と上方語のアクセントを、それぞれ取交しながら他意なく語りあつてゐる姿を、銀座の或るレストランで食卓越しに眺めてゐた。

姉妹が女學生であつた頃、寢間の電燈を消し握手してやすみませうと、互の寢床から手をのばした、姉は正直に手を出し、妹は足を出して姉に摑ませた。それから起つた姉妹喧嘩を、二人は面白さうに聲たてて笑ひながら語りあつてゐる。

二人とも最早さうした娘時代から、かなり遠くなつた年齢である。姉は結婚したが未だに子はなく、妹は三月足らずで結婚に破れ、大和の田舍で老父と暮してゐる。

その妹に緣談の口があつて、姉は妹をそれと知らさず呼びよせた。妹は女學生時代を送つた東京へ、七年ぶりでのぼつてきた。自身の緣談については何も感じてはゐない。姉に着物を買つてもらひ、淺草の觀音樣へお詣りし、それから花の吉原を見物して歸りたいものだと、姉にねだつてゐる。

妹は大和路の奥に女盛りの七年間を埋れてゐる間に、一人で生きる道を考へ覺悟してゐる模樣である。姉が語らなければ、彼女はやはり何も知らずに、春闌けた大和路へ再び一人で歸つてゆくわけだ。路傍の泉のほとりに假睡してゐる間に、轆轤(ろくろ)として過ぎて行つた運命の車の響きを知らなかつたと同樣に。そして姉は恐らく緣談については、妹に何も告げはしないであらう。姉自身緣談の相手に失望し、妹を呼びよせたことを密に後悔してゐる樣子であるから。

春の眺めは花ばかりとは限らない。私のやうな者の身邊にもかうした面白い人事風景が隨處に展開してゐる。しかし自然の櫻花も、勿論惡くはない、私の部屋の窓外に八重櫻が開いた。隣家の庭園の並木であるが、それが一時に開

くと、私の部屋の中までほの赤く照り映えてくる。

此の頃になると毎年若い友人達と、私の部屋で賑かに花見酒をくみかはしたものであるが、その友人達は今は皆戰地に行つてゐる。

「K君はどうしました」と知人から彼等の一人の消息を訊ねられて、

「あれは戰死しましたよ」と答へると、皆「えッ」と愕いてしまふ。

それが私の嘘だとわかり、

「人間の生死といふやうな問題について、戯談を弄するとは怪しからんではないか」となじられ、私にはもとより返答のしやうがない。

なつかしい友人達と別れて會へない間、彼等の記憶は死人にたいするやうに純粋で清らかだ。再び會つて生活を共にするやうになれば、死人が生きかへつてきたやうにこの純粋さは消えてしまふ。

自分の緣談を知らずに遠ざかり消えて行く女人の面影はなつかしいが、これが吾が良人だ、妻だといふ顔で互に向ひあつたら果してどんなものか。その餘情を味ははずに「あの時何故さうと打明けてくれなかつたか」と開きなほられても話が出來ない。

今でも淺草や上野あたりで、毎日鐘は鳴りつづけてゐるのであらうが、その鐘の音を耳にする機會が少くなつた。耳にすればやはり立止つて、じつとその音に聽き入るに違ひない。生者必滅、會者定離、諸行無常の鐘の聲、寂滅爲樂と響くなり。さういふ言葉を子供の頃そらんじて、今でもうろ憶えにおぼえてゐるくらゐであるが、あれは人間の罪障消滅、衆生濟度のために打鳴らされる鐘なのであらうか。

現實日々の生活があわただしく、心内の鐘の音に耳を傾けることも忘れがちな塵境に嫌氣がさして、山の湯へでも旅立たうと思ひ借錢を申込んだら、もうお前には貸せぬと本屋から斷られた。するとそれを押してまで行きたいとも思はなくなつた。

私如き年頃の者がかりそめの出來心にしろ、塵外に生活を避けたいなどとは烏滸の沙汰である。風塵の中にあつて心の澄みを保ちえないやうでは、筆の修業もおぼつかない。ただ肩の痛みのやまないのは困つたものだ。マッサージも駄目、注射も駄目だとなると、溫泉につかつたら治るかなアと考へるのだが、母は神經痛には酒が悪いといふ。

私の酒は嗜むといふほどにすらいたつてゐない、たかだか生活の無聊を紛らす程度のものにすぎないが、過日あまり人目にふれぬ某紙にのつた、尾崎士郎の「酒別離」の文には他人事ならぬ興味をもつた。朗誦すべき文章體で、酒

を絶つ哀情を披瀝し好漢この勇猛心を奮ひおこしたかと嬉しくなつた。

酒に己を喰はれるくらゐなら、林房雄の如く氣負つて西郷隆盛を書いた方がいい。共に文壇に比肩する者もないばかり、豪快な感じのする人々である。

「貴方に西郷隆盛が書けるか」と訊いたら、「いや、己は青年隆盛を書くのだ」と答へた。

なにしろ漲り渡る大河の流れを見るやうな人達である。身の破れ、心の破れ、到底足もとに及ぶものではない。

壺中の天地

小さい變化

私は酒豪ではなく酒仙といふ柄ではもとよりなく、夜毎夜毎の晩酌をたのしむ愛酒家ですらないが、我が大方の時を過す場所といへば、四疊半のアパートの一室と二三の酒場以外にはない。

そして此世の樂みといへば、好める女人が酌ぐ酒か、心のあつた酒友とかはす盃ぐらゐのつつましさを顧みると、今更愕然とする思ひである。

宇野浩二氏の「ゴオゴリ」の序文に、

「およそ大作家の生活ほどつまらないものはない。彼等はその作品の中に精根をすつかり使ひ盡してしまつて生活といふものを少しも殘して置かない」

といふワイルドの言葉が引かれてあるが、私の生活は錨を下してしまつた船のかたちである。稀に友が來り酒精の火が入ると街へ泳ぎだし、醉餘の痴態に心をいためて又港へ歸つてくる。

もつともさうした生活を三、四年繰返してゐる間には、いつとはなく天地自然の間に磅礴する悠々たる顥氣、さういつた一種の氣分に觸れたでもなく、賑かな人生風景を眺望して樂しむゆとりぐらゐは、心の一隅に芽生えてきたかも知れない。

私はもう不惑の年齢である。何かに憑かれたみたいに、せかせかと人生のルートを一巡りしてきた過去の生活を振顧つて、苦笑に似た笑をもらす年頃である。何物にも大概驚かない割に人事に眼が冴えてきて、笑ひの中に何彼とそばだつ狡猾の眼をつつんでゐる。

若年の頃馴染んだ十四、五歳の雛妓が、今なほ妓界に賣れ殘つてゐる由を歸郷の折聞き知り、會ひたく思つたがその儘病氣となつて二ケ月近く引込んでゐる間に、彼女は東

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.